

徳島県における小学生サッカー選手の障害の実態 —メディカルチェックの結果より—

徳島大学病院整形外科

鈴江 直人

徳島大学病院整形外科

松浦 哲也

徳島県立中央病院整形外科

岩目 敏幸

国立病院機構徳島病院整形外科

岩瀬 毅信

【はじめに】

骨格の未熟な成長期の子どもにおいては、スポーツによって加わる過度なストレスにより骨軟骨障害が引き起こされることがある。骨軟骨障害の重症度は様々であり、疾患によっては将来スポーツ活動はおろか、日常生活においても支障を来すものも存在するため、疾患を早期に発見し、早期に治療することは非常に重要である。そこで徳島県では、約30年前より小学生サッカー選手を対象に、成長期スポーツ障害の早期発見を目的としたメディカルチェックを行っている。

【目的】

平成24年度に行われたメディカルチェックの結果より、小学生サッカー選手に発生する障害の実態について報告する。

【対象・方法】

平成24年8月に行われた徳島県の全サッカー少年団チームが参加する大会（第39回徳島県サッカー少年団大会）に参加した全選手を対象にメディカルチェックを行った。メディカルチェックは大会前の事前アンケート、大会期間中の一次検診、大会後の県内協力医療機関での二次検診の3段階で施行した。まず事前アンケートを全選手に配布し、現在の疼痛の有無、過去の疼痛の既往などを調査し、要一次検診選手をピックアップした。大会期間中に医師、理学療法士を中心としたスタッフが会場へ出向き、ピックアップした選手及び診察を希望した選手の診察を行った（一次検診）。診察の結果、医療機関での検査（二次検診）や加療が必要と判断された選手に案内を送り、受診を勧めた。受診した選手に対しては適

宜検査および治療が行われ、その結果をまとめて各チームに報告した。メディカルチェックは強制ではなく自由参加の形態で行った。

【結果】

全113チーム中、アンケートが回収できたのは97チーム（85.8%）であり、総アンケート回収数は1162であった。そのうち、547名（47.1%）に疼痛の既往がみられた。一次検診受診者数は77チーム494名であり、そのうちの394名（79.8%）が要二次検診者であった。しかしながら実際に医療機関を受診したのは106名（26.9%）に過ぎず、受診した選手のうち80名（75.5%）に成長期骨軟骨障害を認めた。具体的な疾患として、シーバー病、オスグッド病、有痛性分裂膝蓋骨、ラルセン病、腰椎分離症、有痛性外脛骨、膝離断性骨軟骨炎などが挙げられた。

【考察】

比較的高いアンケート回収数や一次検診受診率に対し、二次検診受診率が低い理由として、まず一次検診は会場で無料でやっているのに対し、二次検診は保険診療となり有料であることが挙げられる。また医療機関に連れて行く保護者に時間的余裕がなかったり、病院を受診して「休め」と言われるのが嫌だったりといったことが考えられる。しかし実際に医療機関を受診した選手の多くに骨軟骨障害が発見されていることから、受診しなかった選手の中にも高率に骨軟骨障害を認める可能性が高いと思われる。骨軟骨障害のなかには膝離断性骨軟骨炎のような重症度の高い疾患も認められており、今後二次検診受診率の向上が課題である。